

「心の理論」と文学

持 留 浩 二

〔抄 録〕

本論文は、「心の理論」と文学との関係を明らかにしたものである。まず「心の理論」を素描した上で、それと文学や言語との関係について考察している。「心の理論」は他人の精神状態を推測する際に必要とされる機能であるが、この機能は文学作品を読む際にも不可欠なものである。自閉症患者の中には、「心の理論」の正常な機能が欠如しているために、物語の内容を理解できない人が多く見られる。こういった認知科学的観点から文学について考えた時、なぜ我々は文学を読むのかについて一つの新たな答えが浮かび上がってくる。ザンシャインは、「心の理論」がきちんと機能していることを確認することにより得られる喜びが、我々がフィクションを読む理由ではないかと主張している。もちろんこれが我々がフィクションを読む唯一の理由ではないが、認知科学的にはこの主張は的を射ていると言える。

キーワード 心の理論、文学、自閉症、多重志向性、認知科学

序

これまで文学批評は、歴史主義からニュー・クリティシズム、構造主義、ポスト構造主義、精神分析、フェミニズム、そしてディコンストラクションと様々な批評理論の助けを借りて行われてきた。これらの批評理論は時には互いを批判し、時には互いを補完しあいながら発展してきた。

その中で比較的新しい理論としては進化論批評がある。ジョセフ・キャロル (Joseph Carroll) やデイヴィッド・バラシュ (David Barash) とナニーユ・バラシュ (Nanelle Barash) は進化心理学から多くのインスピレーションを得て作品解釈に役立てている。かつて文学批評の分野で心理学批評というと、かつてのフロイトやユングといった精神分析の創始者を思い浮かべたものであるが、心理学はその頃から大きな飛躍を遂げている。ジョン・ワトソン (John Watson) と B・F・スキナー (B. F. Skinner) の行動主義は、進化心理学者からは「不毛」

であると烙印を押されてしまっているが、人間の心を理解する上で、心の中で何が行われているのかは問題にせず、心へのインプットとアウトプットだけに焦点を絞った。そしてその後認知科学が大きな飛躍を見せ、それによって人間の脳の仕組みが徐々に明らかになってきた。進化心理学者は、フロイトの精神分析もワトソンとスキナーの行動主義も、どちらも同じように役立たずな時代遅れのものだと主張するのであるが、それは認知科学の進歩により脳の仕組みにどう取り組めばいいのかが徐々に分かってくるからである。

認知科学の進歩による様々な発見は人間の心を理解する上で多くのヒントを与えてくれた。その中の一つが「心の理論」(“Theory of Mind”)という考えである。この概念は心理学の分野のもので、そもそもは自閉症児の研究との関係で注目されたものである。一見それと文学研究には関係がないと思われるかもしれないが、実はこの「心の理論」という考えと文学とは興味深い関係がある。もっと言うと、それ以前に「心の理論」と我々の言語理解との間には極めて密接で重要な関係があるのだ。本稿では、まず「心の理論」とはどういうものなのかを簡単に紹介し、次にそれと文学との関係を明らかにしたい。

I 「心の理論」

1978年、アメリカの動物心理学者デイヴィッド・プレマック (David Premack) とガイ・ウッドルフ (Guy Woodruff) は「チンパンジーは心の理論を持つか」(“Does the Chimpanzee Have a ‘Theory of Mind?’”) という論文の中で、チンパンジーなど霊長類の動物が、同種の仲間や他の種の動物が感じ考えていることを推測しているかのような行動をとることに注目し、それは「心の理論」という機能が働いているからではないかと指摘した。同種の仲間であれ、他種の動物であれ、他者の行動に心の状態を帰属させることが「心の理論」の機能である。

プレマックが「理論」という言葉を用いたのには理由がある。「この種の推測を可能にするシステムは理論とみなすのが適当である。なぜならそのような状態は直接観察することは不可能であり、またそのようなシステムはその他の動物の行動を予測する際に役に立つからである(515)」とプレマックは言っている。科学において「現象」は目に見えるが「理論」は見えない。この二者の関係は、人間の行動に当てはめてみると、「行動」は見えるが、その背後の「心」は見えないのと同じ関係にある。従って、「心」は「現象」というよりは「理論」の性質に近いわけである。さらに、いったん「心」についての理論を構築できれば、科学理論から様々な「現象」の予測がつくのと同じように、人間についても「心の理論」からその人の次の「行動」が読めるようになる。

プレマックは「心の理論」提唱から10年後に「チンパンジーは心の理論を持つか再考」(“Does the Chimpanzee have a Theory of mind?’ Revisited”) という論文の中で、人間以

外の霊長類が「心の理論」を持つことを示す証拠は未だ乏しいと認めている(179)。霊長類が「心の理論」を進化させたプロセスについて、「心の理論」研究の第一人者であるサイモン・バロン＝コーエン (Simon Baron-Cohen) は『自閉症とマインド・ブラインドネス』(Mind-blindness: An Essay on Autism and Theory of Mind) の中で次のように指摘している。

洪積世に多大な進化が神経認知に起こったことは間違いない。アフォールのアウストラロピテクスが進化してから300万年の間に脳の大きさは3倍になった……。

脳の大きさの増大は多くの原因から生じたようであるが、多くの理論家の意見が一致するところでは、一つ重要な要因として、より優れた「社会的知能」が必要とされたことが挙げられる。「社会的知能」とは、他人の行動についての情報を処理し、それぞれの行動に対し適応的に反応する能力のことである。このようなより優れた社会的知能が必要となったのは、人間を除く霊長類の大多数が社会的動物であり、最小で2頭、最大で200頭からなるグループで生活していたためである。(13-14)

霊長類にとっての大きな課題は、集団において他者の行動を理解し、予測し、操作することであったのだ。進化心理学者のスティーブン・ピンカー (Steven Pinker) が『言語を生み出す本能』(*The Language Instinct: How the Mind Creates Language*) の中で指摘しているように、人間が他の種の動物と比べて大きく違う点の一つは、互いに協力して強大な敵に打ち勝つことができるということである。地上には人間よりも大きな体や強力な生存能力を備えた動物がたくさんいる。そんな中で決して肉体的に恵まれているとは言えない人間が生き残ることができたのは、人間が互いに協力し合って巨大で強力な敵に打ち勝ってきたからである。それを可能にしたのが言語であったのだとピンカーは言うが(2-3)、「心の理論」の機能も同じくらい重要であったはずだ。

プレマックの指摘どおり「心の理論」を持っているのは人間だけかもしれないが、人間について言うと、「心の理論」の出現時期は4歳ごろであると言われている。「心の理論」を持つということは、自己及び他者の目的、意図、知識、信念、思考、疑念、推測、ふり、好みなどの内容が理解できるということである。そしてそのためには、少々ややこしい話になるが、一次的信念の理解のみならず二次的信念が理解できなければならない。

一次的信念とは、「Aさんは物Xが場所Yにあると(誤って)信じている」というものであり、二次的信念とは、「Aさんは物Xが場所Yにある、とBさんは(誤って)信じている」という信念である。子安増生は『心の理論』の中で次のように指摘している。

まず第一に、二次的信念の理解ができるようになると、他者から見た自分を知ることによって、他者を通じた自己理解を促進できるということがある。……このような二次的信

念の理解を通じて「私」の自己理解もまた進んでいくのである。

第二に、二次的信念の理解は、三次的信念へ、そしてさらには一般にn次の信念の理解へと発展し、そのことが複雑な人間関係を理解するために必要不可欠のものとなるのである……。

第三に、このような高次の信念は、登場人物の込み入った人間関係を描く小説やドラマを理解する前提となり、そのような小説やドラマを通じて子供の世界は広がっていくのである。(104)

この子安の指摘の中で特に注意してもらいたいのは、高次の信念の理解は「登場人物の込み入った人間関係を描く小説やドラマを理解する前提となる」という部分である。我々が小説やドラマを理解するために必要なのは言語能力だけではない。いくら高度な言語能力を有していても「心の理論」がうまく機能していないと小説やドラマが理解できないのである。そしてその「心の理論」がうまく機能していない代表的な人たちが自閉症の人たちであると言われている。

そもそも「心の理論」は自閉症との関わりから注目されるようになったものである。自閉症については次のバロン＝コーエンによる解説に簡潔にまとめられている。

自閉症はあらゆる子供の精神異常の中で最も深刻なものと考えられている。幸いなことに、それはごくまれにしか発生せず、その発生率は1万人中4人から15人程度である。調べさえすれば、それは、どこの国においても、どんな社会階層においても起こっていることが分かるだろう。主な症状は、生後2、3年において、社会的能力、そしてコミュニケーション能力の発達に明らかな異常が見られ、そのような子供の遊びに特徴的なのは、普通なら見られる柔軟性、想像性、そしてふりをすることが欠如していることである。

そのような異常は、多くの生物学的異常、例えば、てんかん、知的障害、そして様々な脳の病理と関係している可能性がある。また多くの場合、この異常には遺伝的基盤があるようだ。というのも、一卵性双生児や血がつながっている兄弟における自閉症やそれに関する問題の発生リスクは、ただ単に偶然に自閉症が起こるときに予想されるよりもはるかに高い確率となっているからである。今のところ、残念ながら自閉症は一生続く障害である。(Baron-Cohen, *Mindblindness* 60)

自閉症の中でも様々なタイプがあり、アスペルガー症候群は比較的軽度の自閉症で、言語の遅滞は見られず、知能指数も平均あるいはそれ以上である。さらに自閉症でありながら常人には絶対不可能な飛びぬけた才能（コンピュータ並みの素早い計算能力や瞬時に目にしたものを記憶するフォトグラフィック・メモリーなど）を備えているサヴァン症候群は時々マスコミで

取り上げられ、その驚異的な能力は広く知られている。

1985年、バロン＝コーエンらは「自閉症は心の理論を持つか」(“Does the Autistic Child Have a ‘Theory of Mind?’”)という論文において、自閉症と診断される子供たちが「誤った信念」課題をうまくこなすことができないと報告した。ダウン症の子供たちと比較すると、多くの認知課題では自閉症の子供たちの方が上回っているのに、「誤った信念」課題のスコアだけが大きく下回るということを示したのである。

「誤った信念」課題はダニエル・デネット (Daniel Dennet) が原型を提案し、ジョゼフ・パーナー (Josef Perner) とハインツ・ヴィマー (Heinz Wimmer) によって実験レベルに発展させられたもので、マキシとチョコレートについての課題となっている。この課題では、はじめに人形劇などによって子供に次のようなストーリーを聞かせる。「マキシは緑の戸棚にチョコレートをしまってから遊びに出かけました。マキシがいない間にお母さんはそのチョコを取り出し、料理のために少し使い、次に緑ではなく青い戸棚にしまいました。しばらくしてマキシがお腹を空かせて遊び場から帰ってきました」。そこで子供に問いかけるのである「マキシはチョコレートがどこにあると思っているのでしょうか?」

健全な「心の理論」を備えている子供であれば、マキシの「誤った信念」を正しく推測し、「緑の戸棚」と答える。しかし自閉症児のうちこの「誤った信念」課題をパスすることができるのはわずか20～35%にすぎないのだ。デネットは、「誤った信念」課題が、「心の理論」が獲得されているかどうかを判断するためのリトマス試験紙であると指摘している (Dennet 570)。

一方脳科学においては、「心の理論」についてミラーニューロンとの関係が指摘されている。ミラーニューロンとは、猿の脳におけるニューロン活動の研究の過程で発見されたもので、猿が、手を伸ばして餌を取っても、他の個体が手を伸ばして餌を取るのを見ても同じように活動する神経細胞である。『心を生みだす脳のシステム』の中で茂木健一郎は次のように指摘している。

神経科学における最大の発見の一つと言われているこのニューロンは、猿の前頭葉の運動前野 (F 5 野) で見いだされた。そして興味深いことに、人間の脳において、猿で言う F 5 野に相当するのは、言語における運動出力を担う領域であるブローカ野であることが示唆されているのである。

さらに興味深いことに、現在までのところ、猿におけるミラーニューロンは、何らかの目標物に対する行動 (例えば、手を伸ばして餌を取るという行動) についてのみ見いだされている。このようなニューロンの性質は、その存在が、相手の意図を推測する「心の理論」の機能を構築する上で本質的な役割を果たしているという考え方を裏付けている。

(92)

ミラーニューロンの働きにより、他者の行動を見た時に、それをあたかも自分がしているようなシミュレーションを実行することが可能となる。相手の行動を観察し、それは自分のどういう行動に相当するのかを判断し、それによってその相手の行動の背後にある心理状態を推定するのである。さらにミラーニューロンとブローカ野、そして「心の理論」との関係も注目値する。言語と「心の理論」の間には何かしら重要な関係があるはずなのだが、バロン＝コーエンも言うように、この二者の関係についてはほとんど研究がなされていない（Baron-Cohen, *Mindblindness* 132）。

さらに、「心の理論」をうまく機能させるためには、相手の心の状態に共感する無意識の働きとそのような共感の働きを表象化する能力が必要であることを指摘した上で茂木は次のように指摘する。

すなわち、人間におけるような「心の理論」を持つためには、共感を支える志向性と、表象化を支える志向性の働きが有機的に結びつかなければならないということになる。チンパンジーが「心の理論」の存在を検証する誤信念課題に合格できないのは、人間の言語に象徴されるような高度の表象化を支える志向性の働きが欠けているからであり、また自閉症の子供が合格できないのは、共感を支える志向性の働きが欠けているからである。（189）

心理学者アリソン・ゴブニック（Alison Gopnik）とアンドリュー・メルゾフ（Andrew N. Meltzoff）は、人間の子供において他者の心の志向的状态を推測する能力と自分の心の志向的状态を推測する能力に対称性があると指摘している。

これらの調査結果から導き出される結論として言えることは、一般に想像されていたのとは反対に、子供たちは自己理解と他者理解において強い共時性を示すということである。自分自身と他者に関して異なった推測（例えば自分は肉体を持っているとか、他人は心を持っているといった推測）をしなければならないわけではなく、こういった推測を同時に行っているようなのである。各発達段階において、子供たちは自分自身の心と体と他者の心と体の間に強い共通性があるとみなすようなのだ。（181）

この点については同じ指摘がパーナーによりなされている。

我々とは違って自閉症の子供たちが心を理解することができないことから生じる結論として、おそらく最も興味深く、しかし最も研究されていないことは、彼らが自分自身の行動への洞察力に欠けているかもしれないということである。例えば、自分自身の心の表象

的性質を理解することが、子供たちが自らの意志決定のプロセスをよりよく理解する助けとなってくれる。そしてこの洞察力によって彼らは自らの欲望や意志をよりうまくコントロールすることができるようになる。したがって、こういった洞察の欠如は、自閉症の子供たちがコントロールできない感情を爆発させる（かんしゃくを起こす）傾向を持っていることや、日常の決まりごとへの急な変更に対処する際にある種の頑固さを示してしまうことを説明してくれるかもしれない。(133)

これまで「心の理論」について様々な側面を見てきた。まずその機能は「社会的知能」の急激な発達とともに進化してきたのではないかということ。さらに「心の理論」がうまく機能しているかどうかは「誤った信念」課題により判定できること。脳科学からは、「心の理論」は脳のミラーニューロンと関係しているらしいこと。自閉症児においては、人間の言語に象徴されるような表象化の働きが欠けているために「心の理論」がうまく機能しないこと。そしてそのために自閉症児は他者の心を読み取るのみならず、自らの精神状態へもアクセスできないこと。子安は「高次の信念は、登場人物の込み入った人間関係を描く小説やドラマを理解する前提となる」と指摘していたが、次に「心の理論」と文学との関係について明らかにしたい。

II 「心の理論」と文学

リサ・ザンシャイン (Lisa Zunshine) は文学研究者であるが、認知科学や進化心理学といった比較的新しい視点から文学研究を進めている。『なぜ我々はフィクションを読むのか——心の理論と小説——』(*Why We Read Fiction: Theory of Mind and the Novel*) の中でザンシャインは、自閉症患者はフィクションや物語への興味を欠いているという傾向があると指摘している。フィクションを読むには相手の心を読み取るマインドリーディング (心の理論と言い換えてもいい) の機能を必要とするのだが、自閉症患者はその機能に欠陥があるためである(8)。

自閉症とフィクションの関係を明らかにするにおいて、ザンシャインはアリゾナ大学の教員であるテンプル・グランディン (Temple Grandin) の例を挙げている。グランディンは自閉症研究においてしばしば言及される有名な自閉症患者である。幼い頃から自閉症の兆候を全て持っていたグランディンを神経科医のオリバー・サックス (Oliver Sacks) が訪ね、詳細なインタビュー取材を行い、その内容が「ある神経科医のノート——火星に降り立った人類学者——」 (“A Neurologist’s Notebook: An Anthropologist on Mars”) というタイトルで雑誌『ニューヨーカー』 (*The New Yorker*) に掲載された。農学博士であるグランディンは当時コロラド州立大学で教育と研究に従事していた。サックスはグランディンがフィクションについてどう感じているかを次のように記している。

彼女が言うには、彼女はロミオとジュリエットに当惑させられた（「私には彼らが何をしようとしているのか分からなかった」）。そして『ハムレット』に関して言えば、劇の前後関係が分からなくなってしまった。彼女はこういった問題を「順序立ての困難さ」のせいにしたが、彼女が登場人物たちに感情移入できず、動機や意図が複雑に絡み合う劇の筋を追うことができなかつたのが問題であったのだ。彼女が言うには、「単純で、はっきりしていて、ありふれた」感情は理解できるが、より複雑な感情や人々が行う駆け引きには困惑させられるとのことであった。「大抵いつでも」と彼女は言った、「自分が火星に降り立った人類学者のように感じるのです」。(112)

農学博士のグランディンは常人ではあり得ない一つの才能を持っていた。彼女は牛の気持ちが理解できるのだ。人間には共感できない彼女が牛となぜ共感できるのかはよく分からないが、彼女はその才能を売りにして、副業として牧場コンサルティングをしていたのである。どういう状況で牛がストレスを感じるのか彼女には分かる。例えば牛を移動させる時に右回りで移動させるのか左回りで移動させるのかで随分と牛に与えるストレスは違ってくるようなのだが、彼女にはその違いが分かるのだ。もちろんストレスが少ない方がミルクを多く生産できる。それで牧場経営者が彼女に相談に来るのだ。

彼女は、肉体的なことや生理学的なもの、つまり動物の痛みや恐怖には共感できるが、人々の心の状態やものの見方には共感できないと感じている。若かりし頃、彼女は最も単純な感情の表現でさえほとんど理解することができなかつた。彼女はのちに、そういった感情の表現を、必ずしもそういう感情を感じることなく解説することを学んだのだ。(Sacks 116)

自閉症である彼女は、接する相手の意図が読み取れないために社会生活にかなりのストレスを感じてしまう。例えば、相手の表情からその人が喜びを感じているのか、怒りを感じているのか、悲しみを感じているのか、楽しんでいるのかがさっぱり分からない。そのために彼女は、人の様々な表情を撮影したビデオ映像を何度も繰り返し見ることによって、人の表情の意味を学習しなければならなかつた。しかも一度学習した内容もすぐに忘れ去られてしまうので、定期的に何度も何度も繰り返し映像を見続けなければならない。そういう方法で彼女は感情を学習し、それによって何とか日常生活を送ることができたのだ。もちろんそれは「心の理論」の獲得を意味しているのではなく、あくまで一時的な迂回路を使ったに過ぎない。グランディンの言語理解についてサックスは次のように指摘している。

そしてここでもテンプルは、普通の、あるいは社会的な言語の理解においてきわめて異

常なところを見せている。つまり彼女は今も、ほのめかし、仮定、皮肉、隠喩、ジョークといったものが理解できない。科学やテクノロジーの言語には大きな安心感を抱いている。そういった言葉は、明言されない前提に頼ることがかなり少ないので、はるかに明確で分かりやすいのだ。(117)

社会的な言語理解には複雑な感情の理解が不可欠であるが、「心の理論」の正常な機能を欠いているために、彼女にはそういった言語理解が困難なのだ。当然小説の理解も難しくなってくる。自閉症患者の多くは「心の理論」機能の欠陥のために小説が理解できないが、「心の理論」とフィクションの関係についてザンシャインは次のように指摘している。

私たちが読むものを理解するプロセスは、一般的に「キャラクター」と呼んでいるものろい言語構造に、様々な考え、感情、欲望をもちえる力を付与する我々の能力に基づいているように見える。もっと言うと、我々が登場人物たちの気持ちを推測し、それによって彼らの行動を予測可能にしてくれる「手がかり」を探し求める能力に基づいているのだ。文学は広く心の理論メカニズムを利用し、それに刺激を与えている。心の理論は実在の人々を扱うべく進化したものであり、あるレベルでは、読者はフィクションのキャラクターは実在の人物ではないと分かっているながらも、それでも文学は心の理論メカニズムを利用するのだ。(10)

ザンシャインの書名「なぜ我々はフィクションを読むのか」という問いへの答えをここで考えてみたい。少なからぬ人々がその答えを、よりよいマインドリーダー、つまりよりよい心の読み手となるためと考えるかもしれないが、実はそうではない。先ほど引用したバロン＝コーエンによる自閉症の解説を思い起こしてもらいたい。自閉症は遺伝的基盤を持っており、その障害は一生続くと指摘されていた。自閉症における「心の理論」の機能不全の克服はほとんどありえないとバロン＝コーエンは結論づけている (Baron-Cohen, *Mindblindness* 143)。マインドリーディングの機能は先天的なものであり、その発現時期は4歳頃からであるにしても、後天的に獲得する性質のものではないのだ。つまりいくらフィクションを読んで、その中に出てくる登場人物に共感できるようにトレーニングしても、マインドリーディングの力が上がるわけではない。だからグランディンも人の表情が映ったビデオ映像を何度も繰り返し見続けなければならなかったのだ。ザンシャインは言う「心の理論は我々が小説を読むことを可能にさせるのだが、しかし小説を読むことが我々をよりよいマインドリーダーにさせるわけではない(35)」。

ではなぜ我々はフィクションを読むのだろうか？ ザンシャインの答えはこうだ。フィクションを読んでいて、主人公の心の状態を理解しながらも、自分はその主人公ではないことが分

かっているということは、その読者の「心の理論」がきちんと機能している証拠なのであり、フィクションを読むことにより与えられる喜びは、私たちのマインドリーディングの適応能力テストをパスしたという意識から来るのである(18)。

つまり認知科学的な視点から我々が文学を読む理由を考えた時、それは、我々の「心の理論」の機能が良好に働いていることを確認するため、もっと言うと、確認したことから来る喜びを得るためであるということが言えるのである。だからと言って、他の文学批評理論を否定するわけではない。例えば、進化心理学者のピンカーは『心の仕組み』(*How the Mind Works*)の中で、なぜ我々が小説を読むのかについてシミュレーション説をとっている。我々は、小説を読むことによって、その中に出てくる様々なシチュエーションを疑似体験し、それぞれの場面で自分ならどう行動するかをシミュレーションすることによって、実際にそれに近い状況に出会った時に、より間違いない選択肢を選ぶことが出来るというのが彼の考え方である(539)。私はこのピンカーの説は正しいと思う。我々が文学を読むときに、その理由がたった一つであるとは考えにくい。例えば、もし「心の理論」がうまく機能していることを確認することだけがフィクションを読む理由であれば、作品が教訓的である必要がそれほどあるだろうか。逆に我々が現実をシミュレートすることが我々が作品を読む唯一の理由であれば、ジェイムズ・ジョイスやバージニア・ウルフのような複雑で難解な芸術的文体を用いる必要があるとは思えない。ザンシャインもまたそのことを重々承知していて、自分の認知文学批評が他の文学批評理論と衝突するわけではないと指摘している。それを認めた上で、なお「心の理論」がうまく機能していることを確認することは我々がフィクションを読む立派な理由の一つなのだ。

では実際に文学作品を読み解くにはどれだけ複雑な「心の理論」機能の行使が必要とされるのかを見てみよう。まず前に引用した箇所では子安はこう言っていた「二次的信念の理解は、三次的信念へ、そしてさらには一般にn次の信念の理解へと発展し、そのことが複雑な人間関係を理解するために必要不可欠のものとなるのである……このような高次の信念は、登場人物の込み入った人間関係を描く小説やドラマを理解する前提となる」。

この「n次の信念」は「志向性」と言い換えることができる。19世紀後半から20世紀初頭にかけて活躍したオーストリアの心理学者フランツ・ブレンターノ(Franz Brentano)は、「志向性」(“intentionality”)こそが、物質にはない心が持つユニークな属性であると考えた。「私が○○を感じる」という主観性の構造は、まさに私たちの持つ志向性である。例えば「ウッディー・アレンの映画は面白い」というのはただの文章であるが、「僕はウッディー・アレンの映画が面白いと思う」と言うと、ここに一つの志向性が加わる。さらに、「マイクは僕がウッディー・アレンの映画を面白いと思っていることを知っている」と言うと、さらに一つの志向性が加わり、2重志向性の文章となる。当然のことながら志向性は多重化していくほど理解が難しくなる。

ザンシャインはウルフの『ダロウェイ夫人』(*Mrs. Dalloway*)の中には、6重の多重志向性の情報処理を行わなければ理解できない文章が書かれていることを指摘している。以下がザンシャインが示している例である。『ダロウェイ夫人』の一場面に出てくる多重志向性を持つ文章を読む時、我々の頭の中では以下のような極めて複雑な読解の処理が行われているのだ。

Woolf *intends us to recognize* [by inserting a parenthetical observation, “so Richard Dalloway felt”] that Richard *is aware* that Hugh *wants* Lady Bruton and Richard to *think* that because the makers of the pen believe that it will never wear out, the editor of the *Times* will *respect* and publish the ideas recorded by this pen (6th level). (33)

ロビン・ダンバー (Robin Dunbar) は多重志向性の文章理解に関する実験結果を紹介している。被験者には二つのタイプのストーリーが与えられる。一つのタイプは連続した出来事の単純な説明、例えば「AはBを生じさせ、それがCという結果になり、今度はDを引き起こした」(“A gave rise to B, which resulted in C, which in turn caused...”)といった文章、もう一つは3から5重の志向性が含まれた文章である。「ジェーンは、ピーターが、サラがサイモンはサラがピーターと付き合いたいと思っていると信じていると思っていると考えていると信じている」(“Jane believes that Peter supposes that Sarah thinks that Simon believes that Sarah would like to go out with Peter”)。被験者には、そのストーリーを読んだあと、志向性のレベルによって分類された一連の質問がなされる。その結果を見てみると、誤答率は一つ目のタイプのストーリーについてはたったの5%であった。多重志向性を持つストーリーについても、4重レベルの志向性までは低い誤答率で5~10%、しかし5重レベルになると急激に60%まで誤答率は上昇する。つまり普通の人にとって4重レベルを超えてマインドリーディングしなければならないストーリーを処理することは極めて困難なのである(240-241)。

しかし4重レベルを超える多重志向性の文章というのは実はめったに使われるものではない。それどころか文学作品においても、そういった複雑な文章は比較的新しい時代の産物なのである。複雑な多重志向性を含む物語は口承文学では不可能だからだ。理由は単純明快で、まず語り手が憶えられないし、聞き手も一度聞いただけですんなり理解できるとは思えない。それゆえ口承文学に4重の志向性を超えるものは見られないだろうとザンシャインは言っている(37-38)。印刷媒体が出来て初めて、そのような複雑で極端な描写が可能となったのだ。もちろん印刷が可能になったとして全ての作家が認知的な未知の領域(4重以上の志向性)へと踏み込むわけではない。ベストセラーの作品などでも、ほとんどがレベル4以内の志向性にとどめた物語となっている。おそらくその理由は、いたずらに読者のマインドリーディング能力に負担をかけることが我々が物語を楽しむ上でプラスには働かないためであろう。4重レベル

を超える複雑な志向性の文章をひたすら読まされる気持ちを想像してもらいたい。どう考えても普通の人間には苦痛以外の何ものともならないはずだ。

事実娯楽小説の代表と言える探偵小説などでも4重以内の志向性の文章しか使用されていないとザンシャインは言う(131)。ゆえに我々は言葉そのものの理解にエネルギーを注ぐことなく、安心して物語の展開に没頭できる。おそらく女性にとっての娯楽小説の代表と言えるロマンス小説でも同じであろう。我々のほとんどにとって多重志向性の文章を読み解くことは苦痛以外の何ものでもないのだ。

ではなぜウルフのような極めて高度な芸術性を持つ作家は多重志向性を用いるのであろうか？なぜ多重志向性の文章なるものが、我々のほとんどがそれを必要としていないにもかかわらず、存在するのか？ザンシャインは、それは、なぜボディー・ビルディングが存在するのかと同じ理由であると言う。彼女は次のように指摘している。

あるテキストが、ある読者によって普通でないとか難解であると受け取られることはあるだろうが（そして、例えばそのテキストが高度な「心の理論」能力を必要とする場合には、実際本当に難解であることもあるだろう）。しかしながら、その難解さが他の読者にとって大きな魅力となることもありえるのだ。そして、特定の歴史的状況と特定のテキストの複製方法が結びついた時に、その難解さが結果的にその作品の人気の継続に貢献することだってありえるのだ。(42)

ボディー・ビルダーの持つ鋼の肉体は果たして日常生活で必要と言えるだろうか？いや、現代社会ではほとんど不要であろう。多重志向性をすんなり理解できる能力も同じである。なのになぜボディービルはなくなるのかといえば、一部の人にとって筋力を強化することそれ自体が快感をもたらすからであろう。鍛えられた筋力はその人の秀でた能力のディスプレイとなる。多重志向性を理解する能力についても同じことが言えるとザンシャインは言う。それ自体は別に日常生活に必要なものではない。しかしある種の人、その能力が優れている人にとっては、その能力を行使すること自体に快感が伴うのだ。それで、多重志向性に優れた能力を持つ読者、あるいは作家は、互いにますます複雑な多重志向性を持つ文章を求める。もちろんボディー・ビルダー同様、そのような複雑な小説を読めるということは、優れた多重志向性を処理する能力のディスプレイとなる。

もちろん前にも指摘したが、卓越した能力をもって多重志向性を処理したり、「心の理論」がうまく機能していることを確認することだけが我々が小説を読む理由ではない。ゆえに認知科学的な視点から文学作品を扱うことは、他の様々な文学批評理論を排斥するものではない。ただ認知科学が明らかにしたことで大切なことは、文学作品を理解するためには言語能力だけでは不十分だということである。「心の理論」が健全に機能していることがフィクションの理

解には不可欠なのである。それは何も私が最後に指摘したように、多重志向性を理解する高度な能力のことだけを言っているのではない。他者の気持ちに共感する能力がなければフィクションは理解できないが、それを可能にしてくれるのが「心の理論」なのである。

「心の理論」と文学の関係、もっと言うと言語一般の関係というのはまだまだ分からないことが多いが、実はかなり興味深く、追究する価値のある分野である。茂木は次のように言っている。

現代的な認知科学の手法が確立する前から、多くの哲学者たちが、他人の心の状態、すなわち、その志向的な状態を読み取る能力は、「言語」能力と深い関係があると考えてきた。すなわち、第三章で議論した、言語の意味を支える志向性が、他者の心の志向的な状態を読みとる能力と深く関わっていると考えられてきた。

このような哲学者の直感は、結局正しかったのかもしれない。私たちが他人の心を読みとるためには、高度な表象化の能力、すなわち言語のような抽象的なシンボルを表象し、操作する能力が必要なかもしれない。確かに、誤信念課題において要求されている「今までこういうことがあった」という過去の出来事の積み重ねや、対象となる人の人格、今日の前にある状況の文化的な文脈などを総合的に反映した表象化の能力は、ほとんど言語的能力であると言い換えてもよい。(茂木 180)

結 び

「社会的動物」である人間にとって、他人がどう感じ考えているかを推測する「心の理論」の機能は極めて重要である。自閉症児にはこの機能が欠けており、それゆえ日常生活において多大な困難を強いられることになる。また「心の理論」は我々が文学作品を読む際にも重要になってくる。自閉症患者は、「心の理論」が正常に機能していないために、小説の登場人物に感情移入できず、物語の筋を追うことができないのだ。脳科学では「心の理論」とミラーニューロンの関係、さらにはそれと言語との関係が指摘されているが、まだまだ分からないことも多い。

文学研究の立場からザンシャインは、我々がフィクションを読むのは、「心の理論」がきちんと機能していることを確認したことからくる喜びを得るためであるとしている。実際ウルフの作品には6重の多重志向性を含む文章が出てくるが、これは普通の人には理解できない極めて難解な文章である。このような難解な文体を読むことは、ほとんどの人にとっては苦痛以外の何ものでもないが、高度な「心の理論」の持ち主には楽しみとなるのだとザンシャインは言う。

文学研究は残念ながら長らく決して活発とは言えない学問分野という地位に甘んじてきた。心理学や言語学といった他の分野での新発見からのアイデアをもとに何とか食いつないできたようなところがあるが、逆に文学研究における発見から他の分野に大きな影響を与えたことは

ほとんどなかったように思う。しかしここに、人間の心を理解する上で文学にも大きな役割を果たせる可能性が見え隠れする。ザンシャインはこう言う「もし、認知心理学者が持っている、私たちの情報処理能力の法則への洞察を文学作品研究に応用することが妥当であるならば、その逆もまた生産的なものとなるはずだ(43)」。もしある作品が認知科学者の提供するモデルに合致しない部分を含んでいるとすれば、それは追究する価値を持つのみならず、そこから得られる洞察は逆に認知科学にフィードバックできるだろう。「心の理論」と言語の関係についても今のところ分からないことが多い。文学研究の立場から貢献できることは少なからずあるはずだ。

〔引用文献〕

- Baron-Cohen, Simon. *Mindblindness: An Essay on Autism and Theory of Mind*. Cambridge: The MIT Press, 1995.
- Baron-Cohen, Simon, Leslie, Alan, and Frith, Uta. "Does the Autistic Child Have a 'Theory of Mind?'" *Cognition* 21(1985): 37-46.
- Dennet, Daniel. "Beliefs about Beliefs." *Behavioral and Brain Sciences* 4(1978): 568-570.
- Dunber, Robin. "On the Origin of the Human Mind." *Evolution and the Human Mind: Modularity, Language, and Meta-Cognition*. Eds. P. Carruthers and A. Chamberlain. Cambridge: Cambridge University Press, 2000. 238-53.
- Gopnik, Alison, and Meltzoff, Andrew, N. "Minds, Bodies, and Persons: Young Children's Understanding of the Self and Others as Reflected in Imitation and Theory of Mind Research." *Self-Awareness in Animals and Humans: Developmental Perspectives*. Eds. S. Parker, R. Mitchell, and M. Boccia. Cambridge: Cambridge University Press, 1994. 166-186.
- Perner, Josef. "The Theory of Mind Deficit in Autism: Rethinking the Metarepresentation Theory". *Understanding Other Minds: Perspectives from Autism*. Eds. S. Baron-Cohen, H. Tager-Flusberg, and D. J. Cohen. Oxford: Oxford University Press, 1993. 112-134.
- Pinker, Steven. *The Language Instinct: How the Mind Creates Language*. New York: William Morrow, 1994. New York: HarperCollins, 2000.
- Pinker, Steven. *How the Mind Works*. New York: W. W. Norton, 1997.
- Premack, David. "'Does the Chimpanzee have a Theory of mind?' Revisited." *Machiavellian Intelligence: Social Expertise and the Evolution of Intellect*. Eds. R. Byrne and A. Whiten. Oxford University Press, 1988. 160-179.
- Premack, David, and Woodruff, Guy. "Does the Chimpanzee Have a 'Theory of Mind?'" *Behavioral and Brain Sciences* 4(1978): 515-526.
- Sacks, Oliver. "A Neurologist's Notebook: An Anthropologist on Mars." *The New Yorker*, December 27, 1993-January 3, 1994(1994): 106-125.
- Zunshine, Lisa. *Why We Read Fiction: Theory of Mind and the Novel*. Columbus: The Ohio State University Press, 2006.
- 子安増生. 『心の理論』. 岩波書店, 2000.
- 茂木健一郎. 『心を生みだす脳のシステム』. 日本放送出版協会, 2001.

(もちどめ こうじ 文学部英文学科)

2008年10月14日受理